

横浜国立大学IMS リスク共生社会創造センター
NPO法人リスク共生社会推進センター 主催

「リスク共生の視点からみた社会課題と対応」シンポジウム

1. 新たなリスクコミュニケーションの仕組みについて

2024年3月27日

NPO法人リスク共生社会推進センター

「リスクコミュニケーション・ガイド」制作チーム

宇於崎 裕美(リーダー)、松永陽子、小杉樹彦

1

本日の発表内容

1. 「リスクコミュニケーション・ガイド」制作チームの活動とメンバーの問題意識
1. 「新たなリスクコミュニケーション」の意味
2. 「リスクコミュニケーション・ガイド」の紹介

2

リスクコミュニケーションの現状

- 日本でリスクコミュニケーションが行われるようになって約25年が経過した
- いまだに「リスクコミュニケーションをどのようにやればいいのか」という関係者の疑問や悩みは尽きない・・・

3

私たちの活動目的

リスク共生社会の実現のために、望ましいリスクコミュニケーションのあり方を、ガイドとして取りまとめ、リスクコミュニケーションの活動を推進する

4

私たちの活動の経緯

- 「リスクコミュニケーション・ガイド」制作チームを募集
- 2022年から4人のメンバーで制作チームを編成、討議

5

ここで言う「新たなリスクコミュニケーション」とは

- 私たちが目指すリスクコミュニケーション(RC)

複数のリスクが存在する社会において、

- 考えるべきリスクとは何か
- そのリスクとどう向き合うのか

を社会全体で考え、方向性を決定するために有効な
社会コミュニケーションの仕組み

- 上記はリスクコミュニケーションの理想的な姿として、すでに提唱されていることではあるが、日本ではまだ実現していないので、あえて「新たな」と強調

6

私たちの問題意識

- 「リスクコミュニケーションはなぜ必要なのか、誰のために行うのか、何をどう変えるべきなのか」という当事者が抱える根本的な疑問や迷いを、**当事者自らが決するための道筋**を示したい

⇒「リスクコミュニケーション・ガイド」の制作へ

- 当事者とは、リスクコミュニケーションに苦勞している事業者・行政の担当者
地域住民や消費者等、現在ステークホルダーとされている人々
- 目指したこと
 1. 明確ではないリスクコミュニケーションの定義を統一
 2. 現場でリスクコミュニケーションが機能しない原因を特定
 3. リスクコミュニケーションを活用して組織内の意思疎通の円滑化

➡ 「リスクコミュニケーションは、避けられないリスクと共生するための『生産的で前向きな活動』である」と誰もが思える社会の実現

7

現場の素朴な疑問

1. リスコミはなぜやらなければならないのか
 - リスクのことは言いづらい
 - リスクを言うと反対されてしまうのでは…
 - 合意を得ないといけないのに、説得ではないと言われると…
2. どうやってリスクを伝えればいいのか
 - わかりやすく、許容できる(管理できる)リスクであることを伝えるにはどうすればいいか
3. リスコミで何が得ればいいのか
 - リスクに関して重要な意見はほとんどでてこない
 - いつまで続ければいいのか

8

リスクコミュニケーション・ガイドに対する期待

- 本ガイドでは、次の3つの観点から**論点を整理**し、より良いRCに向けた**ヒント**を示す。それにより、**当事者が主体**となって一緒に考える道標、すなわち、「**思考のためのツール**」としての役割が期待される
- 観点1: RCを行う**組織**への問い
- 観点2: RCの**企画・計画**に対する問い
- 観点3: RCを行う**社会**への問い

9

必要な整理事項

- リスクコミュニケーションによって実現したい目的
- これまでのリスクコミュニケーション活動の課題の整理
- 目的実現のために必要な準備
 - リスクコミュニケーションのために必要な仕組みの構築
 - 議論に必要なリスクの選択と分析の充分性
 - コミュニケーションに参加する者に要求されることの整理
 - リスクコミュニケーションで可能なことと難しいことの整理

10

「新たなリスクコミュニケーション」 従来型との違い

| これまでの一般的な リスクコミュニケーション | 新たなリスクコミュニケーション |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> • 当事者は事業者・行政だけ • 地域住民、消費者等は対象者 <ul style="list-style-type: none"> • 事業者からリスクについて説明を受ける側 • リスクは明確、固定という前提 • リスクの扱いは変わらない • 事業者・行政の考え方、姿勢は変わらない | <ul style="list-style-type: none"> • 当事者は事業者・行政だけではない • 地域住民、消費者等も当事者 <ul style="list-style-type: none"> • リスクのとらえ方について提言 • リスクのとらえ方は、コミュニケーションの過程で変化する可能性あり • リスクの扱いについて再考を重ね、変化もありうる • 事業者、行政も変化する余地がある |

11

「新たなリスクコミュニケーション」の特徴

- 事業者・行政、地域住民、消費者らが、**社会全体**でリスクをどのようにとらえるのか、どう扱うのかを考える
 - 事業者・行政は柔軟な姿勢を保ち、自分たちの方針や計画、価値観に固執したり、他者に押し付けたりしない
 - **地域住民、消費者は、リスクに対し受け身ではなく、当事者だという意識を持つ**
 - リスクの扱いを他の誰か(例:事業者・行政)に任せるのではなく、自分たちも考え、対応すべきものとしてとらえる
 - **地域住民、消費者は、個人の価値観だけを事業者・行政に押し付けるのではなく、社会全体のリスクとベネフィットを客観的にとらえる努力をする**
 - リスク・トレードオフ(このリスクを避けると他のリスクが増えること)を理解する



- **社会全体**でどのリスクを受け入れるのか、受け入れないのかを議論し、方向性を決めていく = **リスク共生社会の実現**

12

「リスクコミュニケーション・ガイド」の目次(案)

はじめに 本ガイドの意義

第1章 なぜリスクコミュニケーションを行うのかを
問い直す

- 1-1 リスクコミュニケーションを行う組織への問い
- 1-2 リスクコミュニケーションの企画・計画に対する問い
- 1-3 リスクコミュニケーションを行う社会への問い

第2章 リスクコミュニケーションの効果

- 2-1 リスクコミュニケーションの定義
- 2-2 コミュニケーションの価値と仕組み
- 2-3 リスクマネジメントとリスクコミュニケーション
の関係

第3章 リスクコミュニケーションの基本

- 3-1 リスクコミュニケーションの目的
- 3-2 リスクコミュニケーションを実施するための環境

(第3章 リスクコミュニケーションの基本の続き)

- 3-3 リスクコミュニケーションの基本的な手順
- 3-4 リスクコミュニケーションの対象となるリスクの満足
すべき要件
- 3-5 リスク情報の発信の要点
- 3-6 リスクに対する意見の聞き方
- 3-7 リスクに関する議論の要点
- 3-8 議論した結果の活用
- 3-9 リスクコミュニケーションの評価と改善

第4章 より効果的なリスクコミュニケーションのために

- 4-1 組織環境
 - 4-2 社会の環境
 - 4-3 広く社会一般(コミュニケーション参加者)
- おわりに リスクコミュニケーション活用に向けて

13

1-1. リスクコミュニケーションを行う組織への問い

- リスクコミュニケーションをなぜ行うのか
- リスクを理解することとリスクを受容することを混同していないか
- リスクコミュニケーションの対象となっているリスクは、その目的を議論する
ために十分な情報を含んでいるか
- 「だれも反対意見を言わない状態」を目指していないか
- 目指すのは安心なのか
- リスクコミュニケーションは誰のために行うのか
- リスクを「ほぼないもの」「無視できるもの」として扱っていないか
- 「担当者こそ最後まで安心しない」というのが健全な組織文化
- リスクの科学的評価が絶対だと思っていないか

14

1-2. リスクコミュニケーションの企画・計画への問い

- 何をリスクとしているのか
- 何に対する信頼か(組織なのか、個人なのか、システムそのものか)
- システムの信頼と人間性への信頼感は別の話

15

1-3. リスクコミュニケーションを行う社会への問い

- ステークホルダーはリスクの傍観者でよいのか
- 選択する自由と責任に無自覚でいいのか
- 「やるリスク」と「やらないリスク」を公平に比較しているのか

16

今後の予定

- 2024年3月末までに、NPO法人リスク共生社会推進センターのメンバーに対しWeb版「リスクコミュニケーション・ガイド」を発表
- 2024年度末までに、書籍を出版し一般への普及を目指す

17

ご清聴、ありがとうございました。



18